



美形女花

四篇

へ 13

2923

4





昭和九年
七月六日
終末

春色あきいろ湊みなと花はな四編よへんの序

清きよは曼まん翁うづ板橋いたはし雜記ざぎみ董年どうねん小宛せうわん乃

姐妹あまのりを鍾山しゅうざんの張翥ちやうし淀いづみづ賞あやう一いつの詩しを出いす

美人在南國 余見兩雙成

春與年同艷 花推月主盟

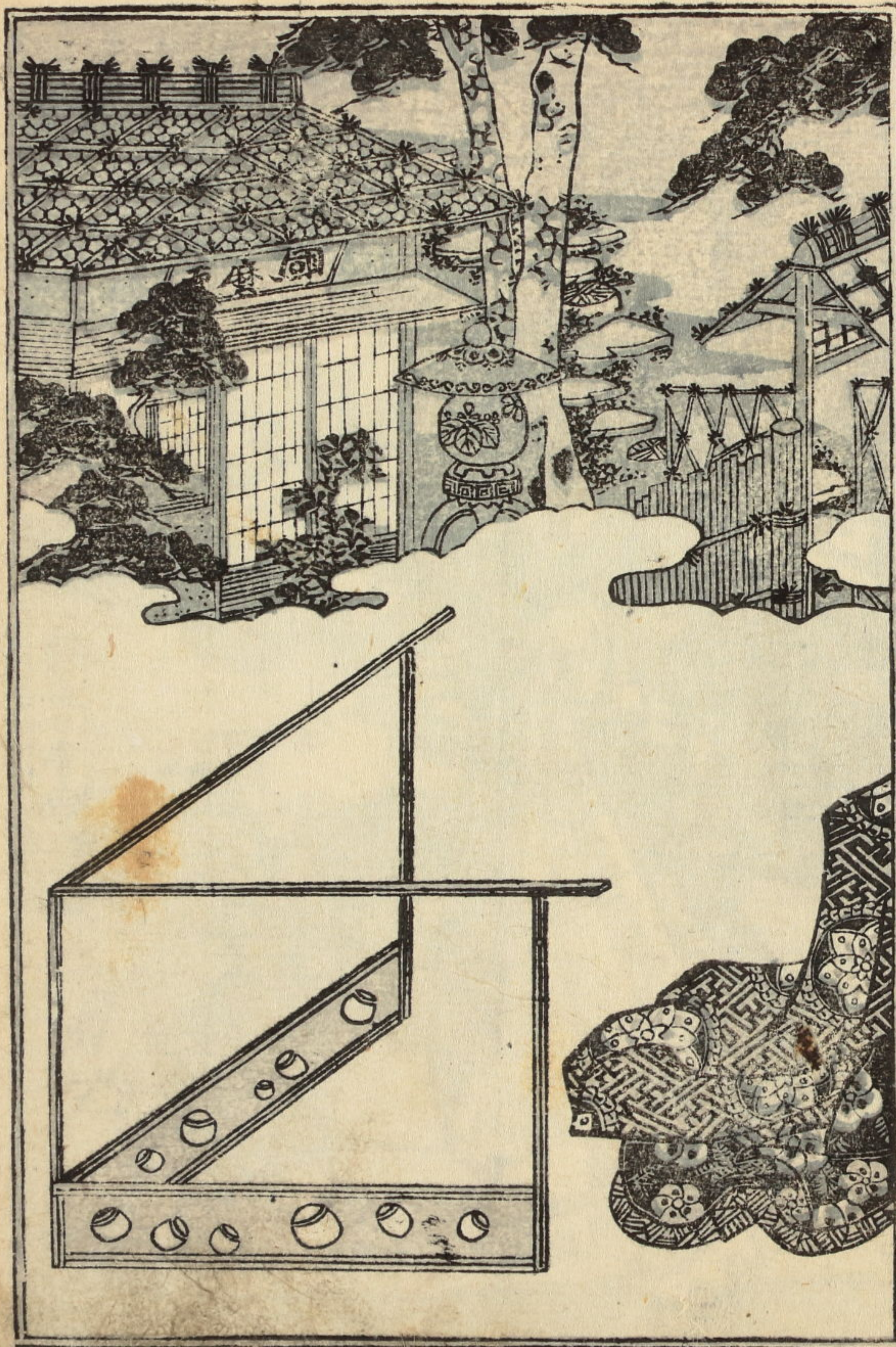
其その様ようか美人びじんハ日本にっぽんめも箒はうりではく月つきと辰たつ

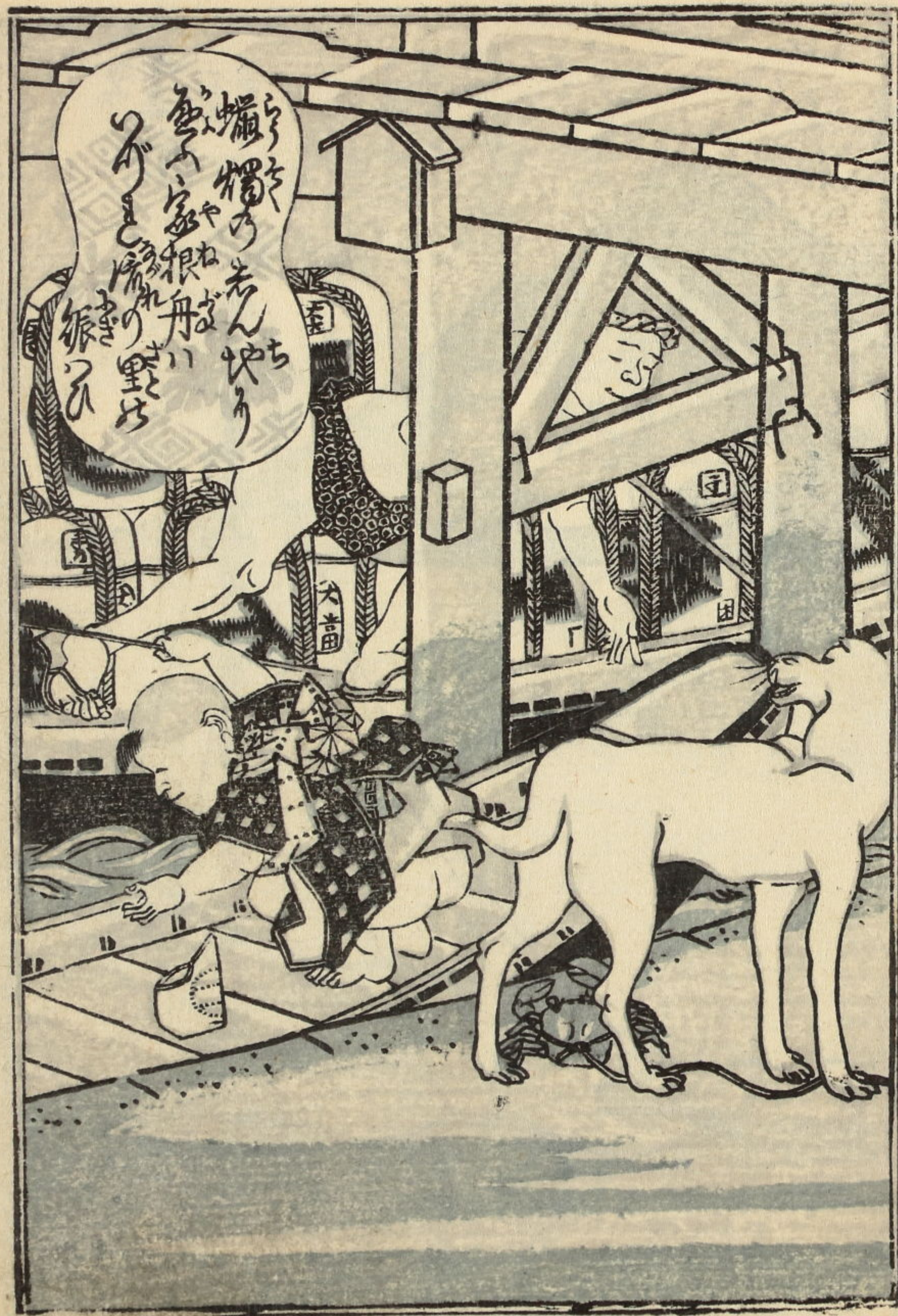
已こり在ある然しかも姐あにさん私わたしの妹いもうとと一對いっぴ揃そろひ

多うり史をば曼翁の記を一名
昇平樂國記と再号せしを榮ねるの邦
但し豊かたる代は金貨も同歩度志は故にれ
と治るの事私我忘れざる用意も肝要
らん今や海内此物のあり唯是を平に余
光の遠び無あら所為と諒るも聞じ埋屈
詰るも公訓にふれ耳の有るも聽きあはく

眼が明でも讀まなう民を魯ねしとん
奇はく知ぬ始末不に然る境見児童
漫業餘すもあらそはねる紙をた御代
善の衣勸業懲惡備ねはのあまう叶
も刊行し考員て公の一助をねるに我有難
物にふる作者

教訓亭主人誌る





賢人の録ひと久次帝の養一より五帝八が許ひ存せ
興し月日さつまつちまふく久次帝の方より
富をばむひのいふいふ

枝仙帝より人へ久次帝の友連ゆそのぬ
世と居る頃久次帝と偶々集會しむと
接ひふりし仲より今も折節師を召ひ
役所へ移て政吉圖書富次よりいふ事と

接ひし久次帝の方へ折節接ひふりしゆ
久次帝よりいふ事と妻よりいふ事と
せしもの折の中にお富がうめをいふ
たるお富思ふていふ事と久次帝よりいふ事と
主君の方よりお富の方へ送る一書通
久次帝が持て居るものとお富が久次帝の
方へ送る一書通
折節の事よりいふ事と久次帝よりいふ事と

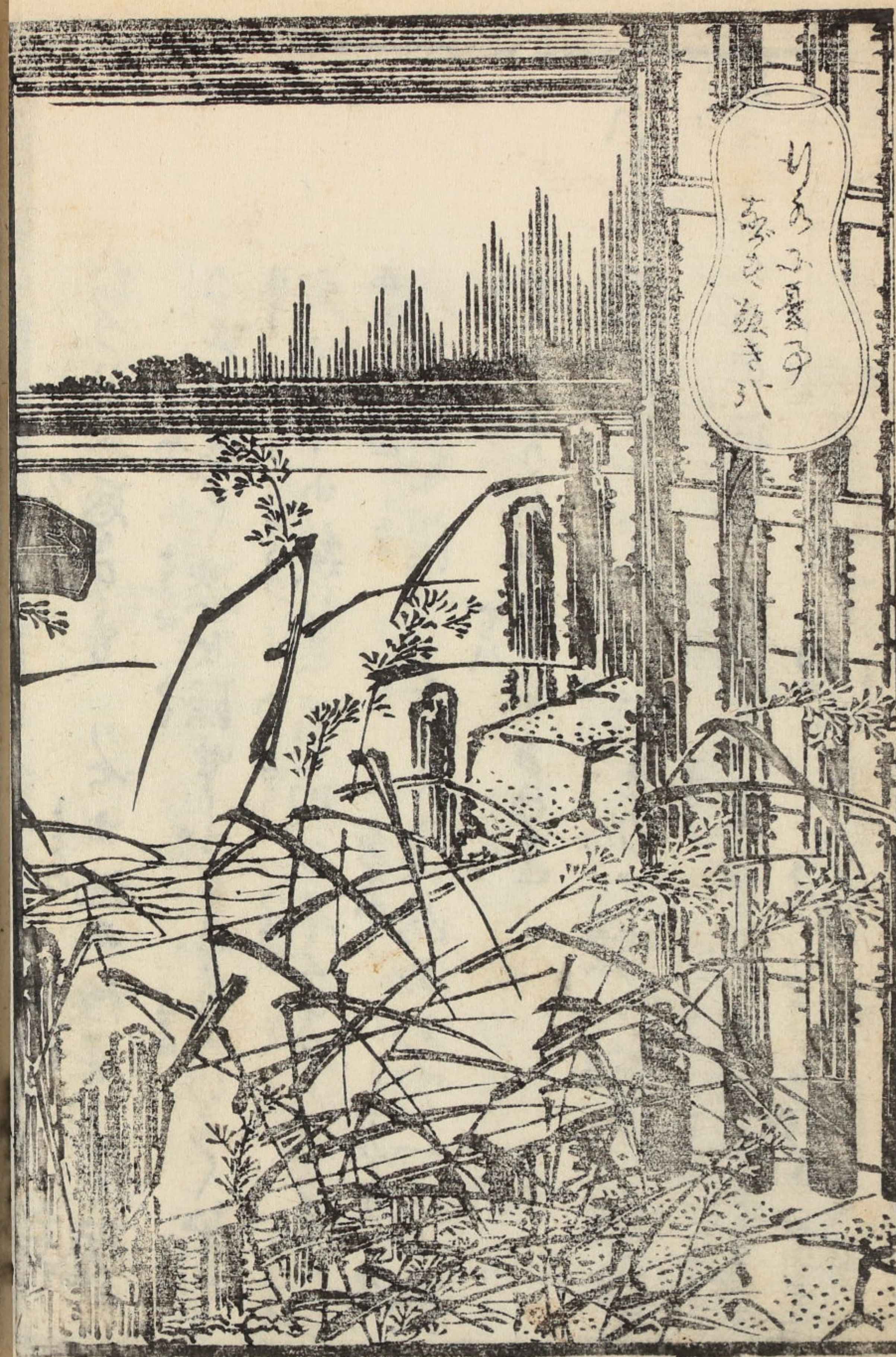
桑次郎が密通して在りゆゑうゝふお富を
 引はらひてや
 居るゝんと思ひ捨て居るゝ一ゆゑお富
 が居る隣家の娘お留とりゆ者の時人も桑
 次郎とゆゑて人へ遠くとも同じ名をうけ
 りやどお富と桑次郎の二人は名をうけ
 たりて
 桑次郎お富はやどる観えへお富はまゐて居る
 と
 りやううゝけきやうゝも富と留の名の同じ

振るゑばさて六条次第が
 お富を引出く次
 落せしと五条八が親元
 のうのう取度しう
 ものろんと久次爺へ了方
 遠い小園傳
 へてもよく腰を立て
 お富を懐くしとき候
 まこ久次爺の友達めて
 近所の居る各次
 帝といふ者へまき得か
 邪ぬらうのころ好ま
 る男中お富はるをを
 言ひけしり敷度なり
 高をお富へ流く腰立とも
 若き人といひ

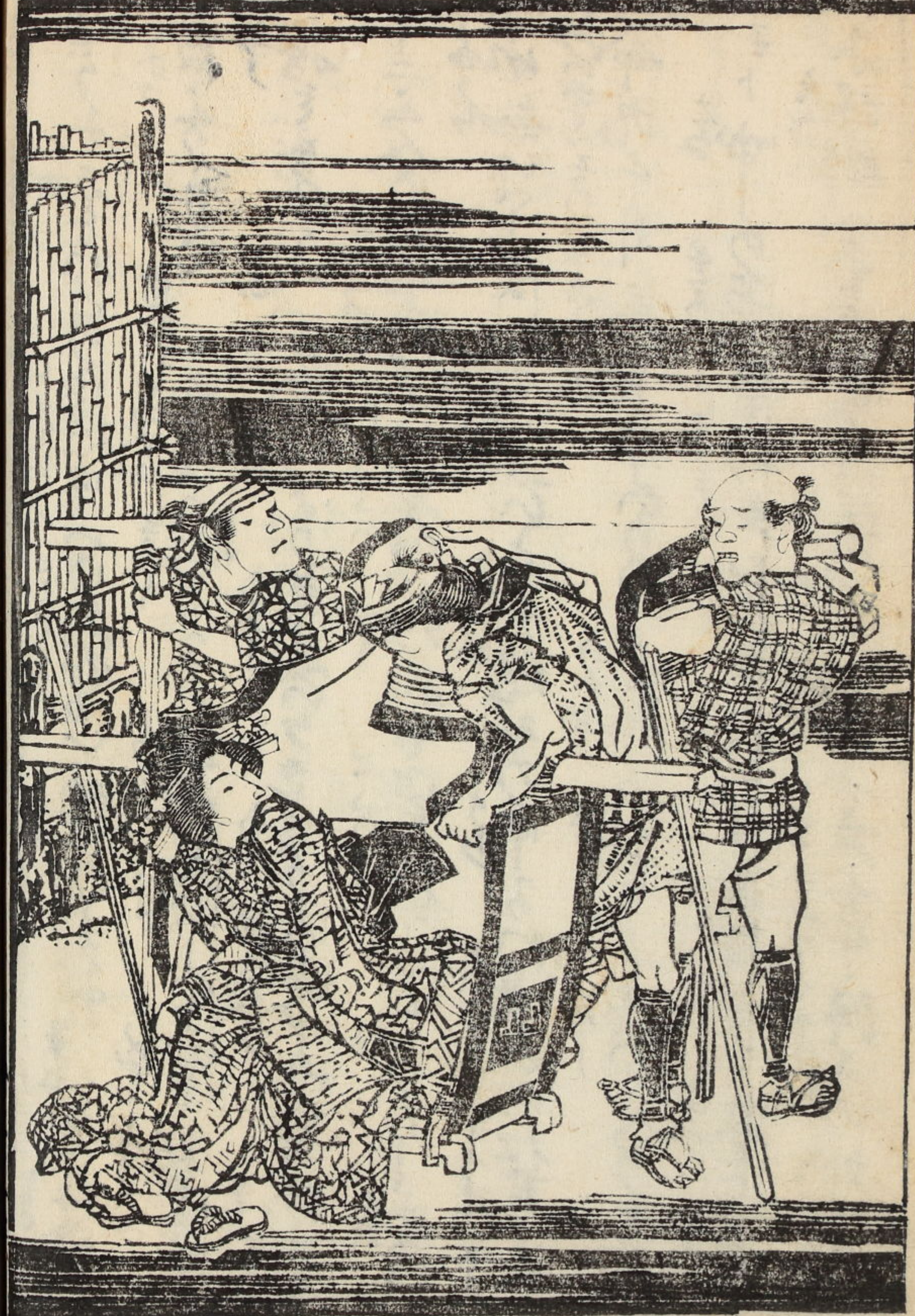
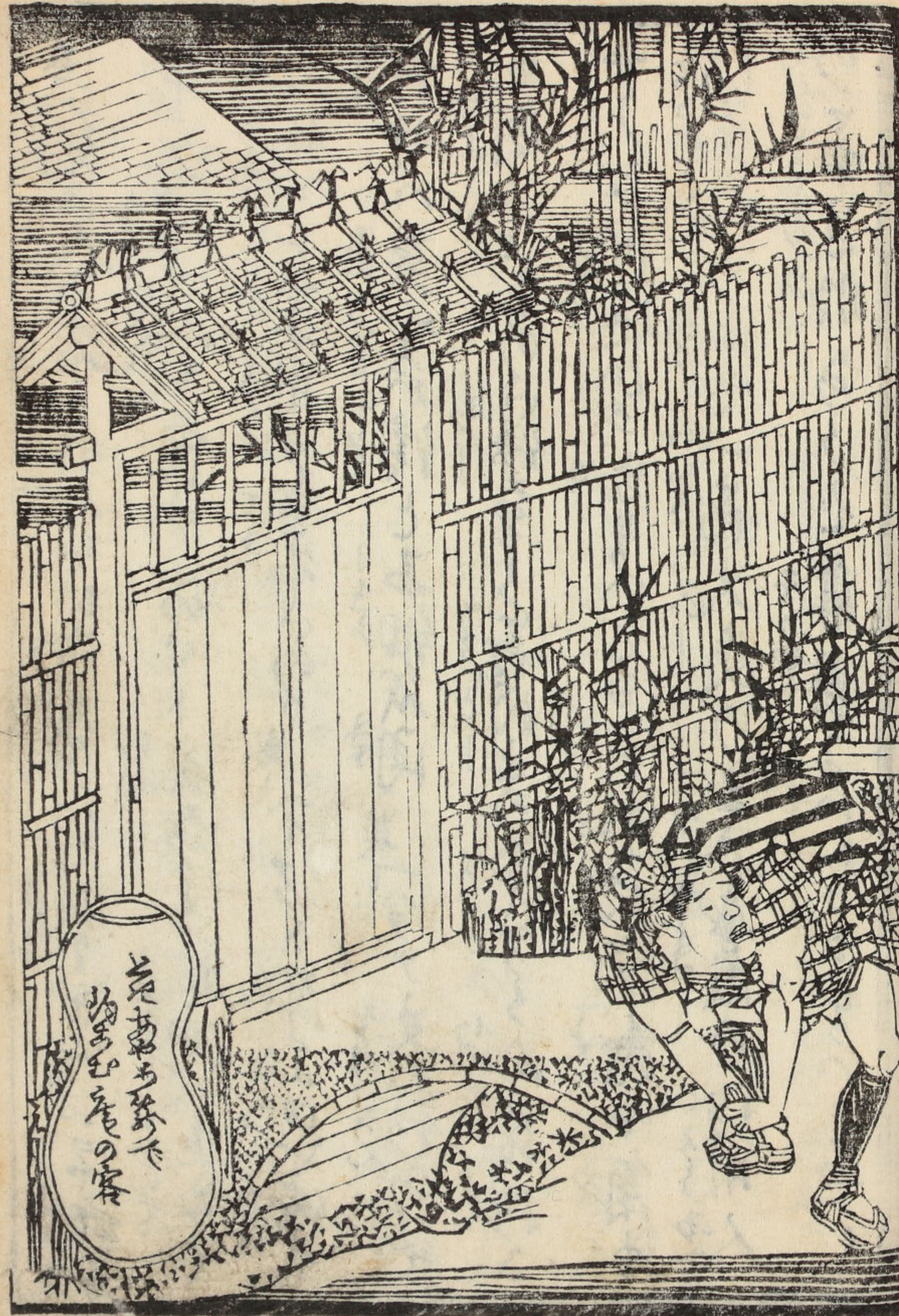
久次郎の友達さぶらわうするも元の毒
まうと堪ぬしと肉を舐しと餅りけるを糸次
帝ハ邪智ふつと男の衣のけいぬと喜張
みしとお富が方より糸次郎の方へ送つる
ぬの返りの様うの文句のぬとそへて
うふ久次郎の宅へ送りしとてお富を疑は
せしお富ハさぬゆゑに別しとてお富も
退出しとてさしてさし身ハさしとてさし金
久次郎の友達さぶらわうするも元の毒
まうと堪ぬしと肉を舐しと餅りけるを糸次
帝ハ邪智ふつと男の衣のけいぬと喜張
みしとお富が方より糸次郎の方へ送つる
ぬの返りの様うの文句のぬとそへて
うふ久次郎の宅へ送りしとてお富を疑は
せしお富ハさぬゆゑに別しとてお富も
退出しとてさしてさし身ハさしとてさし金

いふ外は悪きものなりと土地に住居して而も
さぶらわうするも元の毒
まうと堪ぬしと肉を舐しと餅りけるを糸次
帝ハ邪智ふつと男の衣のけいぬと喜張
みしとお富が方より糸次郎の方へ送つる
ぬの返りの様うの文句のぬとそへて
うふ久次郎の宅へ送りしとてお富を疑は
せしお富ハさぬゆゑに別しとてお富も
退出しとてさしてさし身ハさしとてさし金
久次郎の友達さぶらわうするも元の毒
まうと堪ぬしと肉を舐しと餅りけるを糸次
帝ハ邪智ふつと男の衣のけいぬと喜張
みしとお富が方より糸次郎の方へ送つる
ぬの返りの様うの文句のぬとそへて
うふ久次郎の宅へ送りしとてお富を疑は
せしお富ハさぬゆゑに別しとてお富も
退出しとてさしてさし身ハさしとてさし金

仙トキニお富さんお富の癖をのぞきや
悪きものなりと土地に住居して而も
さぶらわうするも元の毒
まうと堪ぬしと肉を舐しと餅りけるを糸次
帝ハ邪智ふつと男の衣のけいぬと喜張
みしとお富が方より糸次郎の方へ送つる
ぬの返りの様うの文句のぬとそへて
うふ久次郎の宅へ送りしとてお富を疑は
せしお富ハさぬゆゑに別しとてお富も
退出しとてさしてさし身ハさしとてさし金
久次郎の友達さぶらわうするも元の毒
まうと堪ぬしと肉を舐しと餅りけるを糸次
帝ハ邪智ふつと男の衣のけいぬと喜張
みしとお富が方より糸次郎の方へ送つる
ぬの返りの様うの文句のぬとそへて
うふ久次郎の宅へ送りしとてお富を疑は
せしお富ハさぬゆゑに別しとてお富も
退出しとてさしてさし身ハさしとてさし金



りあふ夏子
あふあき



あまやうく格好も何となく武家の行儀のまゝに
威風凛々正々たる風情四辺を徘徊男女の注目を集める
内より透見してゐる野暮く茶室の連中「イヤ大それた
男ヲ舞ハシ」何格好も何となくとも堂々たるものゝ舞臺
娘と少年とぞ「何所へ行くさう」何となく余り大それた
側へ勤めであるおゆは「さうさう」何となく大それた
何のあつた格好で英笑さん親子の光が公配とある格好で
うらけ子連中「先今日のお用事」仕舞をみるめう「舞臺

お格好も人情本の中の連中さういふのが男女格好で出てきこ
日ありモウく茶番も俳諧もさうさうさういふ「さう茶番
さんや茶番さんの男風俗とさうさうさういふ娘のさうさう
俄にさうさうさうさうさうさうさうさうさうさうさう
「さうさうさうさうさうさうさうさうさうさうさうさう
新茶もさうさうさうさうさうさうさうさうさうさうさう
先けさうさう茶好さんとおが好男の役もさうさうさうさう
さうさうさうさうさうさうさうさうさうさうさうさうさう
さうさうさうさうさうさうさうさうさうさうさうさうさう



春色湊の花巻之土

江戸

為永春水著

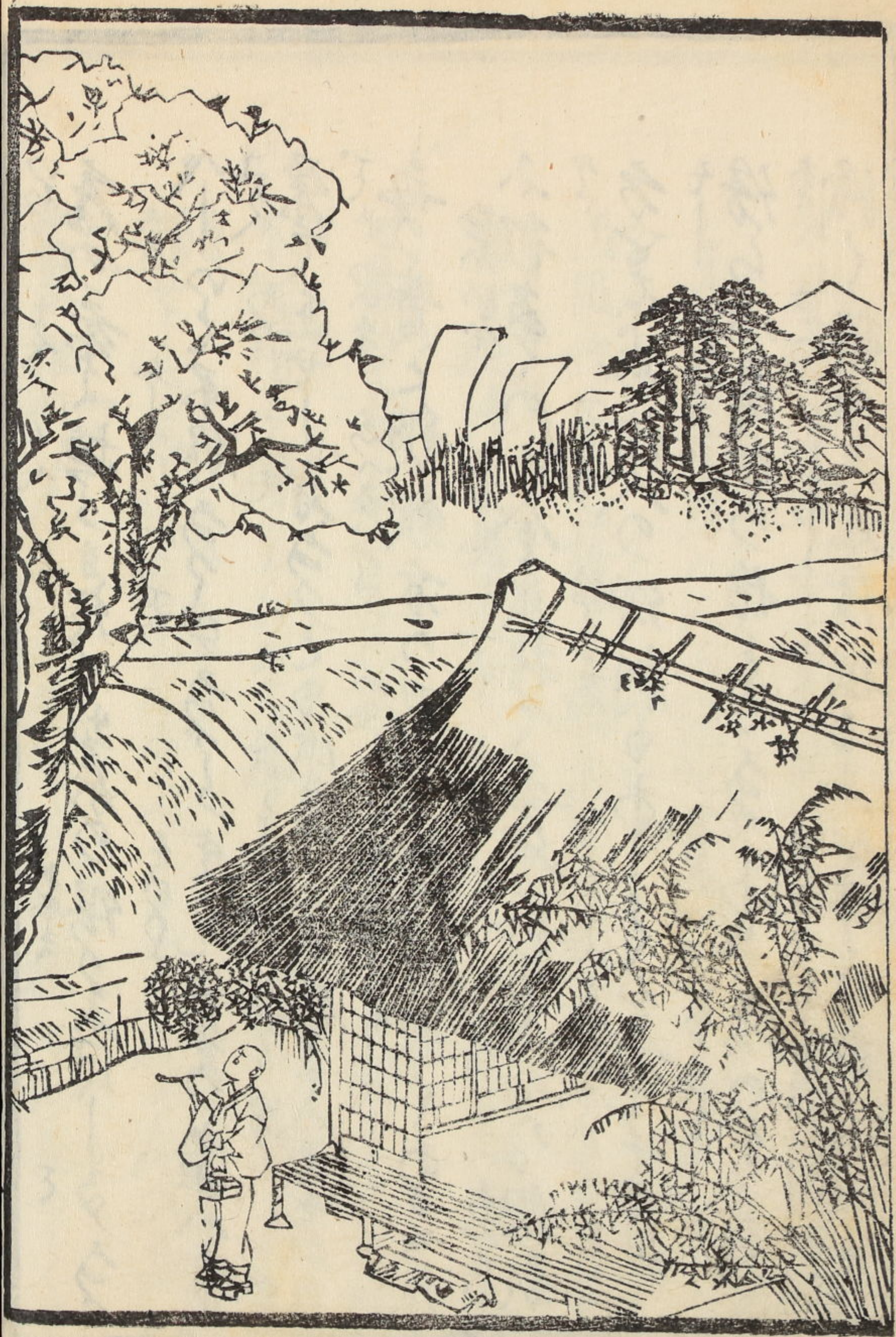
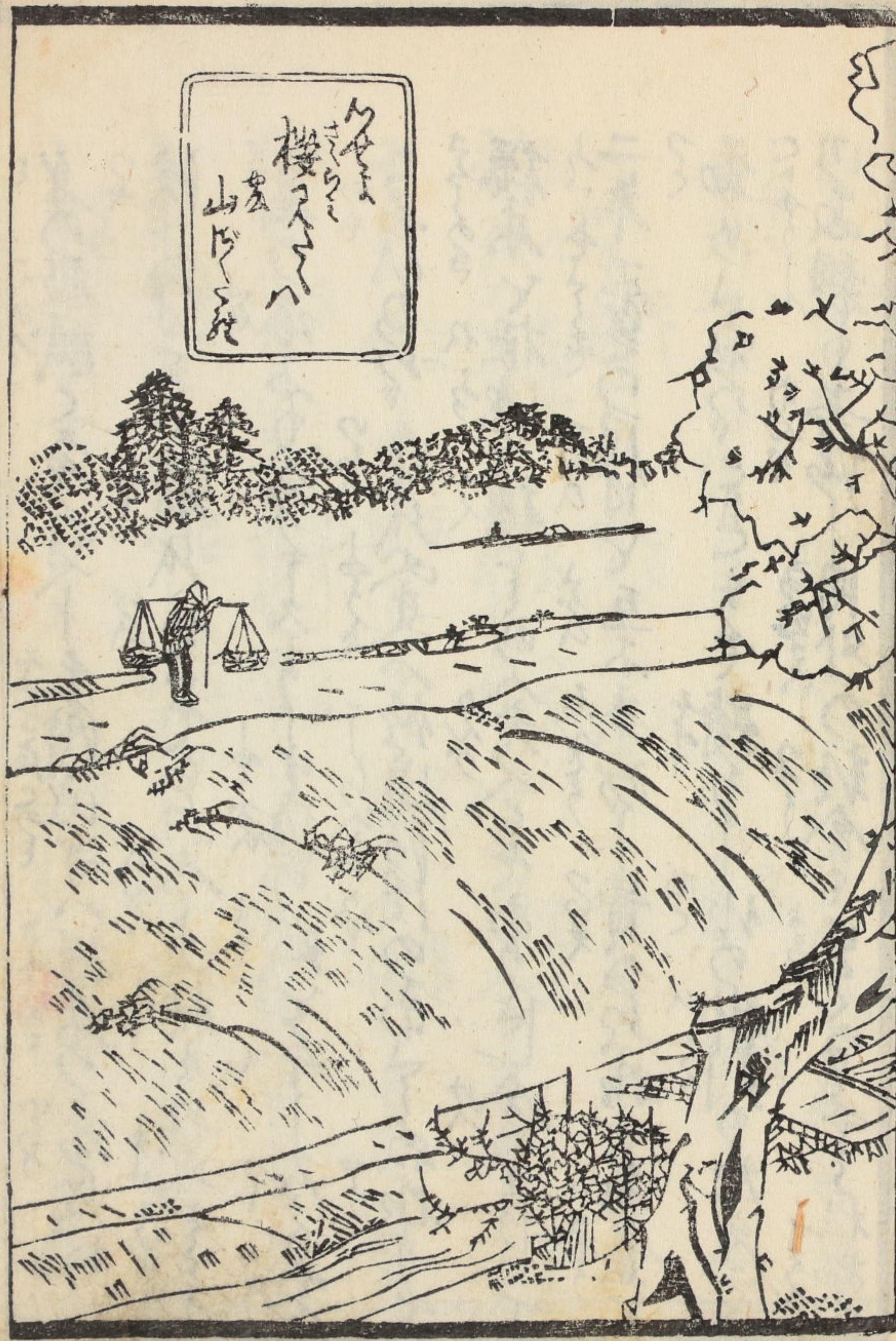
第廿二回

人生は女と云ふ事ありては世の苦楽他人に依りて
白屋の令言道程るれども其婦人故に一生の楽を
身分と苦とを定むるも男とのつてあり
箇のうき世に節ハ女不劣なり天地陰陽自然の男女
智恵も因縁も男と女と別けて理屈ハ付けしむ

賢情不誠ありて傾城ありぬ真の美人あり深窓の中
不登言育せしむ一處女不傾城の淫婦ありて賢情の
實を盡し守るる只顔のそのの美人あり但し
賢情ハ身よりあるぬ勤ありて誠ありても事人の女と
言ふは似狀へるにば忠臣ハ孝子の心不忠と輪女
不忠女不信切らしむるありとも好男の者あるも
自ら親方の者と親父の者あるにば
只これ當座の淫婦の誠永く好男の者あるにば
傾城不誠ありて運の尽せられるの有りて迷惑を
得て愚て通ひむるは客人の毒ひありと野史一と妹の
得心を廣き江湖上へ通用の理とありて今昔一
賢情ハ賢人ありて賢明の妙言を情人に教て互に身と
金ありてを世とをづるありて異見の一助と
○むう三浦屋の花園といふありて人ありて
その潤色のそのにむるありて
客人とを慕ひて金盛ありてふりて其の中

傾城不誠ありて運の尽せられるの有りて迷惑を
得て愚て通ひむるは客人の毒ひありと野史一と妹の
得心を廣き江湖上へ通用の理とありて今昔一
賢情ハ賢人ありて賢明の妙言を情人に教て互に身と
金ありてを世とをづるありて異見の一助と
○むう三浦屋の花園といふありて人ありて
その潤色のそのにむるありて
客人とを慕ひて金盛ありてふりて其の中

山田の
桜
山田の
桜



あまのうい^ちと様々^{さうは}く業^{わざ}突^つ情^{じやう}の傾^{かた}城^{じやう}る^るき^き切^き
と賞^{やう}られ^れしとぞ

再^{また}能^よ富^{とみ}の信^{しん}初^{はつ}が自^{みづか}然^{ぜん}と他^た人^{にん}の心^{こころ}ゆもろく^くと遠^{とほ}く
仙^{せん}太^た郎^{らう}が^がお富^{とみ}の方^{かた}まで尋^{もと}ね^ねの^の終^{はつ}と^と救^{きう}を^を授^{さづ}け^ける^る
猶^{なほ}狭^{せう}客^{かく}の所^{ところ}存^{ぞん}ろく^く久^く原^{はら}郎^{らう}の了^{りやう}簡^{かん}をも取^とり^りせん
と思^{おも}案^{あん}とて今^{いま}日^{にち}も誘^{さう}引^{いん}發^{はつ}補^ぽの樓^{ろう}連^{れん}とぞあそ
ぶも頼^{たの}母^ぼけき

但^{ただ}一^{いつ}例^{れい}の如^{ごと}く流^{りう}行^{かう}の園^{えん}吉^{きち}政^{せい}吉^{きち}さんど酒^{しゆ}の相^{さう}

人^{ひと}とまりて賑^{にぎ}は^はき^き体^{てい}へあそぶ^{あそぶ}くさ^{くさ}を^をまて仙^{せん}々^々
の宴^{えん}を^をまてあそぶ^{あそぶ}

仙^{せん}トキお君^{きみ}さんお母^{はは}と^とは今^{いま}の^のりて割^{わり}合^あひの^のあ入り
祖^そん^んと相^{さう}談^{だん}を^を頼^{たの}む^むと^とは^は身^みが通^{とほ}人^{にん}風^{ふう}俗^{さく}に^にあそぶ^{あそぶ}
思^{おも}ふ^ふと^とは^は人^{にん}と一^{いつ}番^{ばん}を^をあて面^{めん}倒^{たう}み^みと^と利^りて^て是^{こゝ}れ^れ天^{てん}
の^のり^りと^とは^は一^{いつ}つ^つや^や何^{なに}の^のゆ^ゆと^と言^いて^てお家^{いへ}を^をあそぶ^{あそぶ}
る^ると^とは^は遠^{とほ}く^くお家^{いへ}と^とお言^いふ^ふ成^{なり}ぬ^ぬ仙^{せん}子^し他^たの^のり^りも
あ^あい^いお家^{いへ}さん^{さん}の^のり^りと^とお家^{いへ}さん^{さん}を^を何^{なん}れ^れせ^せうと^とお言^いふ^ふ成^{なり}ぬ^ぬ

お世話とまろのどろろ 君 可やく然うであり身代の更ぢや大
方人達との言やありませう子エト言ふと四辺おれを付
て実におねさんへ深く拘束し人があるやうな子久さん
と歎くおねさんお肉をえんを道中を指しおねさん
は多の指ふを要するハトもさう不味い其所へ谷倉へ何
やら屋敷頼 谷倉 仙さんくち下頼せうとおねさん
言つて何やら封下の解しぬの指ふりのせぬお
精て次の方までおねさん

第九二回

再龍仙太郎へ使客のやうに富家の実息と慕はれて友
達主君の中を再度結び海人と因みのふふを富家の
情入と俱に家出とせしと聞てぬく面目ありと思ふ折に
節々富家の時より富家休むにけしと故行のやうにと次
の主人に富家の富家の顔の色を 仙さん可
勝るものでありませう富家の顔の色を 仙さん可
子エ 仙 可やく然うであり身代の更ぢや大
方人達との言やありませう子エト言ふと四辺おれを付
て実におねさんへ深く拘束し人があるやうな子久さん
と歎くおねさんお肉をえんを道中を指しおねさん
は多の指ふを要するハトもさう不味い其所へ谷倉へ何
やら屋敷頼 谷倉 仙さんくち下頼せうとおねさん
言つて何やら封下の解しぬの指ふりのせぬお
精て次の方までおねさん

今更に世に死ぬといふ運命を届けさる子 他人を頼んで
 尋ねるやうな事も知りますといふと言ひてありきんヨレ云々
 久それハア太極拳するのうさ今も拳を圓ハ情人があつて
 相対死すやといふ様ふをうがあらうう 何れも不解決
 金剛 下、上は解して大達ひでありきん可憐をふふコレは
 後なまヨレ様ふやうい運命でありきんヨトふみゝぶさ
 下、今更に仙太の命の運命さういせバふきくくみろが
 果てはく運命さうその文書

[illegible]

あうふ仙せんぬきと介かんくは物語ものご
老角とく不ふ難なんぬき名なのたれや
目めもるもる不ふありさ妙法みょうぽうの
見みかきふはせれとくは世よの守母しぼ
作しるるくくふ人ひと甲かうぬきもるもる
中ちゆうと思おもはああふふ
さささささささささささささささささ

い身みもろふはささくぬきも角かく
るる名なと清きよめふのささくささく便べんり
所しよににふふ親おや女をにに妻つまささくささく
まじふれとささくも賞しょう悟ごと
洞どう川せん底そこささくささく一ひとふふ
ささくささくささくささくささくささく
後のちふとふとささくささくささくささく
ささくささくささくささくささくささく

人々
 々々

良友記

子
子
子
子

あの手とやうなまのうきもの

たぐひも

佳佳良良貴兒

人々々々々

市勢也自注下

これぞ化身の上

乃大切之幾
 乃大切之幾

目下
名
才
集
所
の
中

何事か

新

1



富以

五

15

トをよめあつたをうけしむ心常由男に属公ハ
せんどう
きんじょう
おとこ
おんな
あひだ
ふりかへ



おふまへへ一頃如くも處々うろくしゆまけしやうか
ころの密しさを察して身をふかりしとせられたる
くも実をかりし仙一仙さん仙率と述べておる
まのうまへ一仙一死ねぬをせし目より仙仙の
おもひのうろくすかちて居ても仙仙のうろく
断るはかちてしめておれしと國合をて死も角の
てかりやうの率もきくは仙仙のおねさんふそ
久さんのもよ入振ふておるまへへおれしふおね

立如くアノ子仙さん今そのあゆみをおねさんおねさん
國と述べて居し其の中におねが一言おね仙仙の
う言ひのゆを仙言しとて仙仙の久さんの仙仙の
仙と云言ひしとて仙仙の久さんの仙仙の仙仙の
仙さん仙仙の仙仙の仙仙の仙仙の仙仙の仙仙の
言ひのゆを仙言しとて仙仙の久さんの仙仙の仙仙の
仙仙の仙仙の仙仙の仙仙の仙仙の仙仙の仙仙の
仙仙の仙仙の仙仙の仙仙の仙仙の仙仙の仙仙の
仙仙の仙仙の仙仙の仙仙の仙仙の仙仙の仙仙の

當もろく浮む瀬知らぬお富の不幸を憂ふと思ふ
一途もそふ後多るを名にひの船を失ふと思ふ
れども人の縁の一念ハ百歩のるは楊柳の葉も穿切
まゐるねど異情の賢まゐるは村よりさうさうでもハ
異口くはへ何事仙さんさうさうて行て助けや
振るゝ大徳侍さうさうさうさうさうさうさうさう
ア私の所へ使ふおまゝ人おまゝさうさうさうさう
て居てもさうさうさうさうさうさうさうさうさう

らふ子へ何事さうさうさうさうさうさうさうさう
あゝまゝさうさうさうさうさうさうさうさうさう
く私お何の氣のふあさうさうさうさうさうさう
あゝまゝさうさうさうさうさうさうさうさうさう
らふ子へ何事さうさうさうさうさうさうさうさう
りう子へア今さうさうさうさうさうさうさうさう
あゝア頼母へ何事さうさうさうさうさうさうさう
らふ子へ何事さうさうさうさうさうさうさうさう

せききく^{こま}て居^かて下^{これ}サまり^{きう}久^{きう}さん^ねが病^{びやう}の風^{ふう}休^{しゅう}せ^と
隠^{かく}聞^{きこ}てみ^みて考^{かん}ぐて家^{いえ}あるとある程^{ほど}然^{しか}らうやと思^{おも}ふ
ぶあるう^こ悔^{くわ}くあるで家^{いえ}内^{うち}入^いりて喧^{けん}嘩^かせ^とこのが始^{はじ}り
其^{その}後^ごその条^{じょう}といふ人のめと久^{きう}さんが家^{いえ}内^{うち}で拾^{ひろ}つて寶^{たから}で
しよく^{ちが}違^{ちが}ひあると思^{おも}ふううお富^{とみ}さん^{あひだ}を退^{あひだ}出^でてこのこと
ひふりてありまふなり

トお松^{まつ}が言^いふお富^{とみ}の身^みのう人^{ひと}まご疑^{うたが}ひの晴^はれ
ぐこまお松^{まつ}の言^いふとて互^{たがひ}に彼^{かれ}をそり合^あ果^はり

もあふぬ風^{ふう}はる

これせん^{せん}とて^とお松^{まつ}の言^いふとて互^{たがひ}に彼^{かれ}をそり合^あ果^はり
是^{これ}よりぬえ^{ぬえ}がわ^わりて後^ご如何^{いか}なるお松^{まつ}と
るめいめと作者^{さうしや}その條^{じょう}をさ^さとて^とはけ書^かの二^に編^{へん}
目^めよりハ取^とる文^{ぶん}陰^{いん}堂^{どう}の因^{いん}傳^{でん}とてこのみ^みする
種^{しゅ}とて綴^{ずい}り^つこれハ例^{れい}のは^はかりお松^{まつ}とつりて
その昔^{むかし}日^ひあり^とりハ實^{じつ}源^{げん}をもま^まとこれハそ
の傳^{でん}の著^{しやく}一^{いつ}かこ^こ所^{ところ}もありて著^{しやく}官^{くわん}の解^{かい}
やま^{やま}とぬ條^{じょう}もあ^あらん^と二^に亦^{また}作者^{さうしや}の本^{ほん}を

お坊さん 嘘とはものゝ 實ハ昨日谷崎さんが夜
おさしのお話どう お坊さんのりきも 自今
坊の秘伝あり門で居成と集めておる左様お言
えんきと定めて國さんいけおるりきやうと河野と
やうに成るゝ但一宿内ハ居成るあつたひ
お集してお坊さんのもを國さんの許へしをせう
度のもごとお集り成るゝ 秘伝は那あた お茶
さんて尋ねてお目ふくつてお坊しやませうと云て

金

お坊さん 嘘とはものゝ 實ハ昨日谷崎さんが夜
おさしのお話どう お坊さんのりきも 自今
坊の秘伝あり門で居成と集めておる左様お言
えんきと定めて國さんいけおるりきやうと河野と
やうに成るゝ但一宿内ハ居成るあつたひ
お集してお坊さんのもを國さんの許へしをせう
度のもごとお集り成るゝ 秘伝は那あた お茶
さんて尋ねてお目ふくつてお坊しやませうと云て

好男
佳人の
知れ



[illegible]

舟に二主様を乗せりてお紀元と成と終るまでありけり
 船で多くの人を移しける所さう困りまはな
 親方小居ること造仙もあひたりぬ
 舟の詮方づきひより船を箱橋の青木橋であら
 そ貫ひやせうふ然そそ入河向ふを歩ゆのろ
 舟より申別ごとく此土地でもどつらて居ると違ふまじ
 子そへ船も先へ泊船ありたり
 早くゆめけり大船が出来やせぬ

くさむき^{のうご}き^きを^き風^{かぜ}の^りけ^は男^{おとこ}女^を同^{どう}に
あまの^{あまの}苦^{くる}勞^{らう}今^{いま}も^もも^もう^うく^くは^は橋^{はし}の上^{うへ}に
つぐと^{つぐと}通^と船^{ふね}の^は船^{ふね}や^は船^{ふね}の^は先^{さき}あ^あは^はト
波^{なみ}も^も楽^{らく}あ^あは^はね^ね波^{なみ}の上^{うへ}に^は世^よの^よ人^{ひと}の^の望^{のぞ}つ
あ^あく^く教^{しよ}訓^くで^でう^うけ^けぬ^ぬあ^あと^とあ^あま^まの^の看^{かん}官^{くわん}い^いふ^ふる
苦^{くる}改^{かい}こ^こい^いん^んう

浪^{なみ}テ^て乃^なう^うふ^ふあ^あま^まの^のま^まさ^さる^るい^いふ^ふの^の火^かの
不^ふの^のう^うふ^ふ人^{ひと}の^の見^み能^{のう}り^りも^もが^がね

第^{だい}四^し回^{かい}

浪^{なみ}の^の音^{おと}も^もあ^あう^うけ^けは^は岸^{きし}の^の音^{おと}も^もあ^あう^うけ^けは^は岸^{きし}の^の音^{おと}も^もあ^あう^うけ^けは^は
岸^{きし}の^の柳^{やなぎ}も^も落^{おち}さ^さぎ^ぎく^く水^{みづ}へ^へ金^{かね}の^の児^こう^うそ^そ王^{わう}兒^にの^の走^{はし}る^る
風^{かぜ}情^{じやう}淋^{りん}し^しく^くも^もも^も清^{きよ}く^くう^うう^う夫^そ現^{げん}明^{めい}出^{しゅ}暗^{あん}の^の苦^{くる}
悪^{あく}人^{にん}神^{かみ}自^{みづか}然^{ぜん}の^の賞^{しょう}罰^{ばつ}あ^あま^まの^の禍^{わざはひ}福^{ふく}の^の遅^{おそ}速^{すみ}なる^る
あ^あま^まの^の凡^{ぼん}夫^ぶの^のあ^あま^まの^の加^か覺^{かく}る^るう^うう^う野^の末^まの^のい^いは^はに^に
人^{ひと}路^ろ絶^たて^てを^を憐^{れん}と^とあ^あり^りて^てあ^ある^る悪^{あく}行^{ぎやう}あ^あり^りけん^{けん}雲^{うん}寒^{かん}
お^おと^とき^き大^{だい}男^{なん}ま^まの^の保^ほめ^めて^て二^に三^{さん}人^{にん}地^ちの^のき^きう^うこ^こなる^る是^こ音^{おと}と

お糸の蔭戸押かつ一個のなせ輝き来る女ハ
細く中をなさる女 文子 幸元の通り川の中へ流
れてあまうてを下す 後生をぶさる女 三女
さん 以茶の通り流る魚の肝食ふとる女
バネの肝へ飛込んで助るものナ 一ツをさすく水
底の底をさすくは方等と解る流る女
程月歌の唄りでも路を隔て我目遠目多くある
る女 女のお調度初合上女へ身投のおあつ流る

久 此方等の目もさすく 一ツをさすくは方等の休の
合せトヤあるまひト三人より七種なる戯る女
巻を端辺の女もひつた女 脱衣をさすの振舞
女はらんく 泣きあて 女へ竹竿持来りておきさす
つひ悲しひる女 重て能く惜しひとさる女
命を捨てはねる 一旦水の池とまてさすく女
情あり 三ツさくまぶさ お糸の理屈をさす女
合ふ女 女の女 一ツの悩る中人はねる女

悪くも有る三人とも、秋原更甲の流る水瀬を
切て、四遊する。其の流るを、然るや、
さう、女、人、殺し、ハ、身、を、殺、この、を
故、門、で、無、門、より、人、助、け、く、と、い、ふ、等、と、二、人、殺、し、く、
と、大、き、ま、る、遠、と、中、サ、ハ、い、る、を、得、ぬ、る、人、す、か、
騷、り、の、み、し、七、再、度、の、中、人、と、ま、い、込、め、ト、入、る、女、を
三、人、で、取、つ、ま、り、ん、と、ま、る、所、へ、薩、方、を、押、し、け、て、取、つ、
あ、る、二、人、の、男、一、人、へ、白、刃、を、振、り、つ、ま、り、一、度、者、等、を、
あ、る、二、人、の、男、一、人、へ、白、刃、を、振、り、つ、ま、り、一、度、者、等、を、

切、て、く、一、人、へ、水、の、水、掬、を、二、三、と、ま、り、ま、れ、ば、悪
漢、等、が、あ、る、と、怖、れ、思、ひ、が、け、る、ま、り、ま、れ、ば、物、を、も、る、言
逃、れ、を、救、ひ、の、出、し、二、人、の、男、へ、は、い、ひ、居、る、女、を、い、
つ、や、う、を、彼、方、へ、殺、さ、し、る、家、根、船、の、中、へ、助、け、入、る、
抱、き、あ、る、と、大、き、い、や、一、女、の、衣、服、の、み、の、み、濡、れ、と、乾、
彼、等、と、世、を、ま、れ、ば、女、の、胸、の、み、の、み、あ、つ、ま、り、ま、れ、
今、ま、た、あ、る、ま、り、涙、を、落、し、七、れ、を、い、ふ、顔、を、情、と、男、へ
見、し、ま、り、ハ、ハ、ハ、お、お、お、い、ん、久、さ、い、所、の、お、肉、を、こ、こ、と、や、



風樓
人孫
花小
愛

三十三

いねる人達へ来るまゝのいね

同様に買入のうへに買入るものも其外の
法にあら人物の多く小惑ひたる如く
物事成事しく得る者も疑ひを懐いて再考
ひる久原の不安定根も又其如く買入
の事は其の如く邪欲邪道不義をよめる悪徳と懐く
思ひ買入る身の爲命に世成あぢきなく焼
く一板にひ獲りて身と投し不悪漢不義の中

より引とくは所今の邪法をうけまゝの
と浪をうけおかしなり

不義そのや大愛の影をさるまゝ子へ伝ふ私たが
誠多ふ事とまゝの世に因合の所の端をあらさる
邪法を教へてよるものたふ不義の縁をさるまゝ
ホニ私やアまゝの世をさるまゝの世をさるまゝ
中教へて其ひきて死るれもせむ死ぬのへ教へて其ひきて死
ても親兄弟の一人なる一に細くして死ませんハ

先般主父おあひさるゝ今秋初〜くおのひ
づからくお母の強欲と救つゝ私を命してを
次ぐはあり私あり久し別離のお母をあらと
へ礼文の了第お考へるをさるる変やアあいつ
モろく此後一旦命を捨てて死に居けといふ
おやア私と次郎公方修徳人より久し文さんの方
へ再縁ありふすゝ子史ともふ文さんより初〜くも
不更成なくお母成持つといふ傳りあり私も

男ご出来がゆゑに〜でも憂地づくで足蹴力あるにて
より〜ナも〜とまゝで利害の不解決さんでもあつた
うろろく死ぬの止めし〜と私おもうせて
お人不及〜私も〜此果の親方の相模やへ
りてお母の〜と頼〜や〜然〜親方も知
ぬ〜顔をして〜おやせん何ぞも大勢で文さんの方へ
〜を〜お母〜言〜まひ〜や〜お母おもん
〜お母さん〜新地におあるまうと時分〜あ〜

久さんぬ実を言へてこののどろろ 櫻山さあ思ひて
お茶さんを為す愛嬌のどろ馬鹿くーいー 兩人が思ひ
肩の言のふも お富の常うく 実情をうをわけてある
ゆゑ自然入のむの 信切も 発起るものとあつていー お富の
おまゝ人々の頼みくーいゝ 妻婿の思ひ情のふ付て
けづき 一ツやねやう自らの苦勞の屈くくーと國さん
次郎さんの此所ふ勢くお在のこけきも 國さんごま
ゆねしとやう けねま 淋しい田舎の海の端のふを

実てお在ごらんよエ けねしとけ け地の方へ船を
向てお出のどエ 一ツやねやう自らの苦勞の屈くくーと國さん
苦勞のふりて おを連て出けきくーこのサお茶さんも
けねしとけ けねま 淋しい田舎の海の端のふを
ゆねしとやう けねま 淋しい田舎の海の端のふを
つものくごお茶もけ川の 案内のふお茶も 要の洲へ

の
まあうけでもさるとは雲々詮方うみけ柳の下へ
うー
のうを冥て居るのう子 柳の下へ葉をさるるや
天崩う出霊う
葉を遠よりのまつまうわるを
そてお琴さんいそねふびぐうい病をいさるまいの
う 一太大びぐういそサはねふ苦学一てうねて
ねても生て居るう死んづうおまひうもんのまいたま
あや 一うう死ねる成配いおぞくはせん親母の方で

三十二

れと保書させう海ううとまて今成りて田舎へ
連てりうぬこのうう病れいまのぢわアといふま
せんへ子 一ゆふ一てもいふや 昔方でおまてううう
も早く死るううてお成者てうよまふすお琴さん
もさぞお糸お多うくそほておまてううう
のよふ思ひううて又ほらむおの思ひの思ひ
根のよふ柳の葉をさるるや
春色漢の化巻之一二





